

資料 4

2018年10月3日

学校卒業後における障害者の学びの推進方策についての意見

全国手をつなぐ育成会連合会会長 久保厚子

1. 知的障害者の学びの意義について

知的に障害のある人が、夢や希望を持って生きていくためには、障害の程度や生活環境にかかわらず学びの場を得て暮らしを豊かにする機会をえることは大切です。必要な福祉サービスをえて、衣食住を整える事は基本ですが、それだけでは、豊かな生活にはつながりません。生活の幅を広げ、暮らしを楽しみ、自分自身の成長を感じその人らしい人生をえることが、誰にも必要です。

ある知的障害の本人会では、仲間と相談しながら自分たちの生活について考え、共に学ぼうを会則にしています。共感し合い、支え合う仲間作りや、障害ゆえに起こりやすい「つまづき」や「わかりにくさ」を乗り越えるための知識やスキルを学ぶ場としての仲間通しでの活動をおこなっています。

自らが変化することで周囲や社会や自分の人生が変わることを学び、生涯にわたり、しっかりと自己肯定感と他者包容力を学ぶ事が重要です。

2. 知的障害者が生涯にわたり学び続けることの意義について

学校を終えた後の継続的な学びは、人生を豊かなものにしていくには欠かせません。学校卒業後にも、仲間とともに在学時のスポーツや文化芸術、趣味・余暇時間等、豊かなさまざまな経験を、卒業後も継続して楽しむことが必要です。そこでは、社会との折り合いの付け方なお学びが社会性の向上につながる視点も重要です。知的に障害があっても、自分自身の内面を広げ、磨き、ときに新しい自分を見いだす手段が学びです。障害のある人達にとって「学ぶということ」は、人間らしく文化的な生活をしていくための重要な要素です。障害があるからこそ「ゆっくり」「じっくり」と学びあうことができる条件を保障していくことが相互学習の場ともなり、インクルーシブな地域作りにもつながると思います。

残念ながら、知的障害のある人にはこうした学びの機会すら十分には用意されていないのが現実です。卒業後の生活課題を、継続的に学びスキルの向上を得る機会が必要ですが、現在は機会がありません。また在学時に比して、運動量も減りますので、健康維持のためにもスポーツの機会の提供も重要です。

3. 学校卒業後における障害者の学びの充実方策と目指すべき方向性について

先駆的な活動には、学習・文化活動には趣味的な活動内容もありますが、日常の生活や就労などの課題について語り合い、その解決策を練りながら、暮らしを変えていくことを目指した活動が多く見受けられます。

障害の有無や程度に関わらず、一人ひとりのニーズに合ったプログラム（生活マナー、お金の管理、生活していく上で必要な知識等に加え、スポーツや芸術、仲間との交流）やこれを提供する場と、本人が主体的に仲間や地域の人々と共に学び合える場が各地域で確保されることが望ましいと思います。

社会に出ると好きな人ができ、どうしたら自分も相手も大切にしたい関係を作

り誰からも応援してもらえる交際ができるかと言う事は学びの大切なテーマになります。選挙をテーマにし「有権者として自分たちの代表を選ぶ」と言う意識を育むことも大切です。さらには表現活動が自己解放につながる面と、障害のある人達が文化創造の発信者になっていく取り組みも重要です。

一方で学びの機会がなく周囲の関係につまづいたりトラブルに巻き込まれたり、自分の事を自分で決めていく機会が少ないため主体的な自分を獲得することも重要です。そのため企画内容を障害のある人達が主体的に考えて自らの力で計画・実行していくことが大事にしていく必要があります。

4. 既存の多様な学習活動への知的障害者の参加推進策について

既存のカルチャースクールや公民館などでの文化・サークル活動のような一般的な学習活動への参加にあたっては、合理的配慮が必要です。そのためには一人ひとりの障害の特性に向き合って耳を傾けていく働きかけが重要です。

ある団体で双方がスムーズにコミュニケーションをとれるように学習の機会を設けてみたそうです。相手を尊重しながら自分を大切にするという特徴を持つ意思伝達方法で取り組んだところ、障害のある人達からは、「どのように困り具合を伝えていけば良いか悩んでいた。」が「具体的な伝え方が分かった。他の人と交流できて良かった。我慢せずに考えていることを伝えて良いと分かった。」と言う声が上がりました。

スポーツをやりたい本人や、やらせてあげたい周りの関係者がぜひとも思いついた時に、どこにアクセスすれば良いのか情報を届ける仕組みも必要です。

差別や偏見をなくし障害のある人が社会的に排除されないような仕組みを活用しながら合理的配慮について考えるのも参加推進策のひとつととらえます。

5. 取組を推進するためのシステムづくり、基盤の整備について

放課後デイサービスは、全国に事業所が設置されつつあり、生涯教育を在学中から段階を踏んでステップをあげ取り組んで行くうえで、たいへん有効な資源になると期待をしています。ただし急速に発展した面と、事業所によっては内容がレスパイト的だったり、親の就労保障だったり生涯教育のプログラム展開を期待するには厳しい面もあります。本来的な放課後における児童の健全育成や社会教育の場として展開されるよう、学校における個別教育支援計画と福祉の計画相談を共有する場を積極的に設け一体的な関わりとなるよう期待します。

大学などの高等教育機関がその資源を活用し障害のある人達を対象として行う「公開講座」や「オープンカレッジ」の実施している例の積極活用も基盤整備の一助になります。福祉施設や当事者組織などでも様々な学習活動やスポーツリクリエーション活動が行われているため役割を果たしている認識と評価が必要だと思います。障害者による文化芸術を推進する法律も、本年、制定されましたので、都道府県、市町村での基盤整備が進んでいけば参加する機会が増えていくものと期待しております。